

# 【成果概要】2-3 気候変動による印旛沼とその流域への影響と流域管理方法の検討

## 調査結果の概要

### ■ 平成30年度の成果

#### <気候変動影響予測>

- 流域からの流入量は、年平均ベース(総量)で見ると、現在⇒21世紀末頃で減少傾向と予測された。
- 一方、時間雨量で見ると、流域平均雨量50mm/hr等の強い雨の発生頻度は、現在に比べて21世紀末頃では増加する予測結果となった。
- 上記のように雨量・流入量に変化することに起因し、水質悪化要因である植物プランクトン増加の基となる栄養塩について、出水時流入負荷量の増加、その結果年総流入負荷量が増加する可能性が示唆される予測結果となった。

#### <適応策の検討>

- 印旛沼流域適応策検討推進協議会の下、河川・農林・環境分野の学識者、行政等が参加する勉強会を月1回程度開催し、適応策の効果、社会実装について検討した。

適応策メニュー	内容
A 谷津での貯留	谷津の持つ流出抑制機能の活用、小堰堤の設置等による機能強化等により、降雨時の流出を抑制する。
B 水田の遊水機能を活用	豪雨発生時等に、休耕田等に水を引き込むなど水田の遊水機能を活用し、流出を抑制する。
C 水位管理	利水に支障のない範囲で印旛沼の管理水位を低下させることで水質の改善、治水安全度の向上を図る。
D 循環かんがい	低地排水路から高栄養塩水の排水量を減らす。
E 排水機場を活用した沼内循環	機場のポンプ等を使い、水の流動化を図る。

### ■ 明らかとなった課題

- 将来予測において用いる気候パラメータについて、対象流域周辺との比較等により、妥当性の検証を行っておく必要がある。(H31年度検討予定)
- 気候変動影響予測において、21世紀末頃の社会条件を考慮する必要性が指摘された。

### ■ 平成31年度の調査計画

- 将来気候変動影響予測の充実・精緻化
- 適応策メニューの検討・評価
- 適応策の社会実装方法の検討

